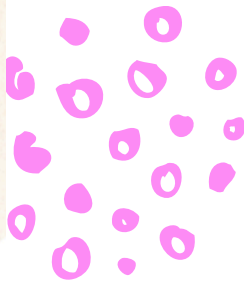
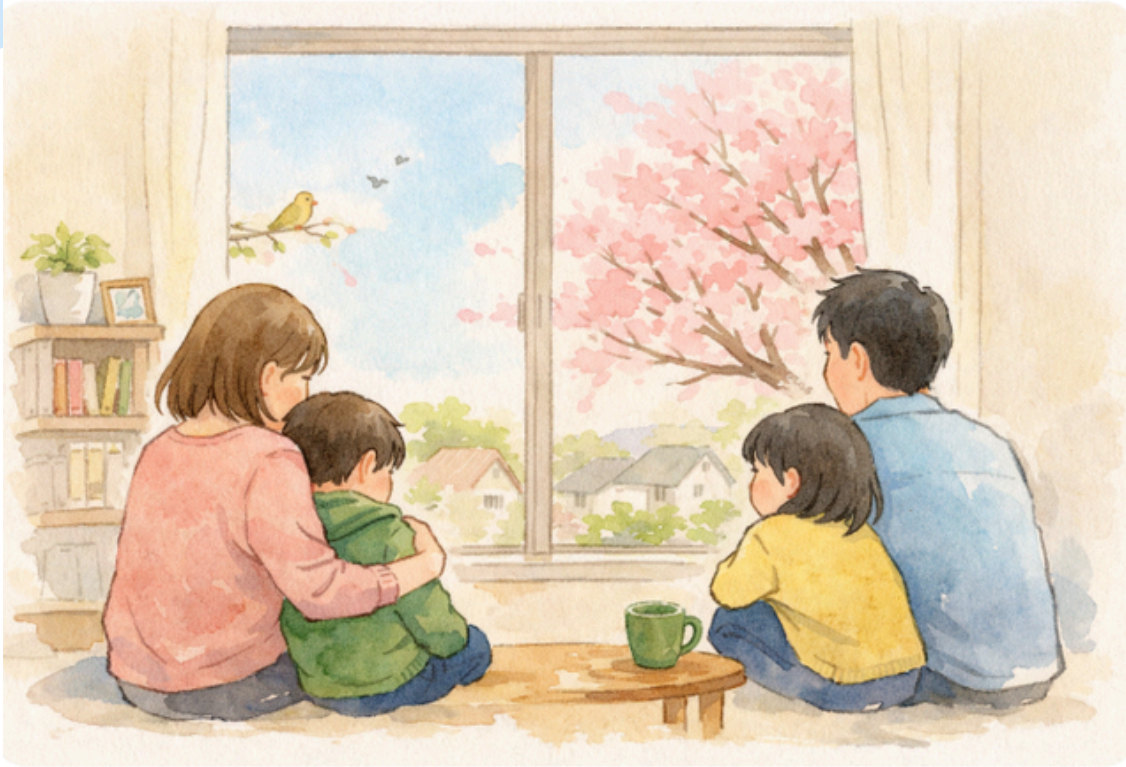


ゆりいか通信

第23号

令和8年3月



家族のなかの、いくつもの思い

子どもが不登校になってしばらくすると、家庭の中で少しずつ考え方の違いが見えてくることがあります。母と父あるいは親と祖父母。同じように子どもを思っているはずなのに、「どうして分かってもらえないのだろう」と感じる場面が増えていくことがあります。

子どものそばで日々の様子を見ていると、小さな変化や揺らぎにも気づきやすくなります。不登校について学び、理解が深まれば深まるほど、「子どもの心を守りたい」という思いが強くなります。その分周囲との温度差に戸惑い、間に立って説明し続けることに疲れてしまうこともあるでしょう。「私が守らなければ」と力が入りすぎてしまうこともあるかもしれません。けれど、考え方の違いそのものが、必ずしも悪いわけでもないと感じています。子どもの育ちには、様々な価値観が存在していることもまた大切です。今は衝突のように見える違いも、子どもが変化していく過程で、社会につながる一つの手がかりになることがあります。すべての人に

同じ理解を求め続けなくてもよいのかもしれない。

一方で、伝え続けることにも意味があります。その場ですぐに変化が見えなくても、話を重ねる中で理解がじんわりと後からついてくることもありえます。環境が整うまでには時間がかかるものです。焦らず、折に触れて言葉にしていくことも、子どもの育ちを支える一つの力です。

ただし、どこまで伝えるかは相手との関係によって選んでよいと思います。どうしても伝わらないと感じるときは少し距離を置き、自分と子どもを守ることも大切です。

三月は、周囲が「次」へと動き出す季節です。進級や進学の話が増え、家庭の中でも思いが揺れやすい時期かもしれないかもしれません。焦りや不安が強まると、考え方の違いもくつきりと浮かび上がります。けれど、春はもともと様々な気持ちたちが交差する季節です。まずは自分が無理をしないかを確認しながら、心にゆとりのあるときに、自分が苦しいけならぬ形で言葉を紡いでいけたらと思います。

恩庄 香織

Our Activities

「お友だちが不登校になったら」

今年度本格開始している「不登校のお友だち」プロジェクトの一環として3月15日(日)に京都市北青少年活動センター会議室にてトークイベントを行います。それに伴い、InstagramやTikTokでの発信をスタートしており、中高生から大きな反応を得ています。リンクはウエブサイトに貼っています。ぜひご覧ください。

イベント終了後も引き続き大人の方々からの応援コメントを募集していますので、ぜひご協力お願いいたします。

応援コメントはこちらから↓



フラツペ

【保護者・支援者向け】

2月のフラツペは、「ゆるりお話し会」でした。

教育委員会の方、養護教諭、小学校教員、高校教員、経験者、保護者の方など、多様な視点が集まり、不登校支援についてざっくばらんに意見を交わしました。話し合いの中で、子ども本人を変えることよりも、安心して育てていける環境づくりが大切だという認識が自然に共有されました。また、学校だけでは子どもの育つ環境の調整に関わりきれない難しさや、学校に行かない選択をした先に地域としてどのような選択肢を用意できるかという課題についても意見交換をし、いろいろな観点で考えるよい機会となりました。



ゆりいか勉強会

ゆりいか研究会では、教職員や支援者の方々を主な対象として、年に数回ゆりいか勉強会を行っています。

3月のゆりいか勉強会では、「ゆりいかアプローチ」をテーマに、不登校の理解と支援の視点を深める時間をつくります。ゆりいかアプローチは、不登校という現象の背景にある心のエネルギー量や要因を推定すること、子ども一人ひとりが社会で自分らしく生きていくための道筋を共に考える実践的な考え方です。その中心にあるのが「ゆりいかシート」というツールで、不登校の要因や心のエネルギーの状態を見立て、支援の方向性を整理していきます。不登校対応の捉え方を広げ、明日からの関わりを活かせる視点を持ち帰る内容です。ぜひご参加ください。

Upcoming Events

3/15
(日)

♥ 「不登校のお友だち」

気になるお友だちがいる人、一緒にしゃべってみませんか。何かヒントがあるかも。

3/29
(日)

★ ゆりいか勉強会・交流会

不登校の子どもたちの次の一歩を考える「ゆりいかアプローチ」についてご紹介します。

4/11
(土)

♥ ゆりいかタイム

「わいわいギャザリング」は4月から「ゆりいかタイム」という名称になりました。

4/12
(日)

♥ 西陣朝市マルシェ

西陣の公園で行われる朝市に出店します。現在、お手伝いをしてくれる若者を募集中。



ゆりいか研究会

- ★ 教職員・若者支援者対象
- ◇ 保護者・若者支援者対象
- ♥ 高校生年代の若者対象

いずれも詳細はゆりいか研究会ウェブサイトをご覧ください。

今月のコラム

名前という名の扉

大学の保健室という場所は、心身の不調だけでなく、時には所在なさや孤独を抱えた学生がふらりと訪れる場所でもある。

初対面の学生と向き合う時、私はよく「名前」について尋ねることにしている。「素敵なお名前ですね。どんな由来があるのですか？」この問いに対する反応は驚くほど千差万別だ。ある学生は待ってましたと言わんばかりに、瞳を輝かせて語りだす。「海のように広い心を持つようにと父が付けてくれました」と誇らしげに話す姿からは、これまでの人生で受けてきた愛情の豊かさが透けて見える。一方で、少し照れくさそうに「画数が良かったみたいで」「有名な神社でいくつかの候補の中から両親が選びました」とはにかむ学生や「実はあまり好きじゃなくて」とうつむく学生もいる。その一挙手一投足が、彼らの自己肯定感や家族との距離感を雄弁に語る。

そして興味深いのは、保護者の方と接する機会がある際にも、同じ話題が大きな役割を果たすことだ。かつてわが子の、名を考えたときの高揚感、あるいは悩みぬいた末の決断。親子が語る名づけのエピソードには当時の祈るような想いが凝縮されている。それを聴くことで目の前の学生が一人の独立した存在であると同時に、誰かにとっての「かけがえのない宝物」であることを再認識させられる。保護者の方も生まれたときの喜びを思い出す瞬間になるようだ。

名前を切り口に会話を始めることは、単なるアイスブレイクではない。それは「あなたという存在を深く知りたい・関心がある」というメッセージの提示であり、深い対話へ導くための出発点となる。名前の由来を辿る道は、やがて彼らが今抱えている悩みや将来への不安といった本質的な対話へと繋がっていく。

く。

保健室の扉を叩いたとき、彼らはまだ自分の物語をうまく言葉にできないかもしれない。しかし、その手始めとして自分の名前について語ることは、自らのルーツを見つめ直し、自己を受け入れる小さな一歩になるのではないだろうか。

今日もまた、新しい名前との出会いを楽しみに、私は学生を迎え入れる。

養護教諭

教育カウンセラー

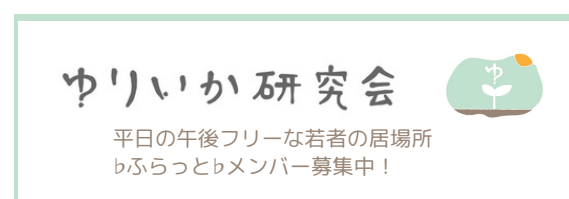
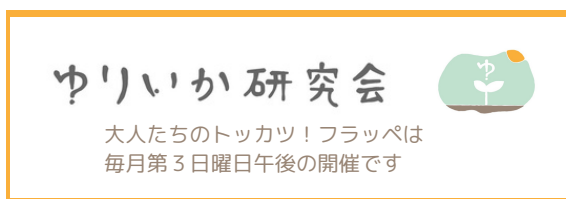
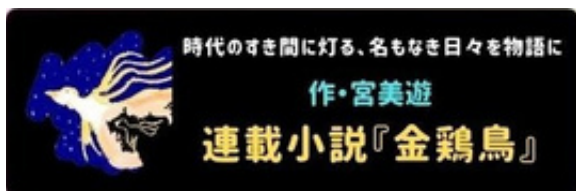
杉本芙美子



Thanks to

THOSE WHO WARMLY SUPPORT US

支援者の皆様（順不同）



多喜誠子さま、杉本さま、宮坂 修平さま、T.OGAWAさま
クラウドファンディングおよびその他の形で協賛・寄付をしていただいたみなさまに心より感謝申し上げます。CAMPFIRE Communityにおきまして引き続きクラウドファンディングを受け付けております。また協賛広告や直接の寄付も受け付けております。関心をお持ちの方がいらっしゃいましたらぜひお声がけください。



令和8年度協賛広告の募集

日頃より、ゆりいか研究会の活動にあたたかいご支援をお寄せいただき、心より感謝申し上げます。皆さまからのご寄付やご協力が、学びや出会いの場を継続する大きな力となっています。引き続き、4月以降の協賛広告を募集しております。寄付や広報へのご協力など、さまざまな形で活動を支えていただけましたら幸いです。関心をお持ちの方は、QRコードよりお申し込みください。



《連続小説》



金鶏鳥

宮美遊

幼少期 (二十)

大正二年、信男は七歳になっていた。いつもの弟国(おおぐに)の寺の境内で遊んでいた信男と兄の辰郎が帰ろうとした時、竜太が興奮気味に走って来た。

「おーい、点いたぞー」
息を切らせながら、みんなに知らせる。

「何が？」

信男が尋ねた。

「ステンシヨへ行くこのう、ガス燈が点いとんのやぞ、明るいぞー」

「ほんまか？見に行こか？」

「行こに」

「行こう」

子ども達は口々に言って、走りだした。

相可駅の前の広場には、見上げるような高さのガス燈がシューと音を立てていた。その周りには既にたくさんの人が集まって、子どもも大人も同じようにガス燈を見つめている。

当時は皆どこの家もオイルラン

プを使っていた。オイルランプでは、そばにいる人の顔は見えるが、少し離れるとぼんやりとかすかにしか見えない。それに比べてガス燈の灯は煌々とあたりに光を解き放っている。そんなガス燈の光を、恥ずかしいほど明るいと思男は感じた。竜太も同じように感じたのだらう。突然、
「アツカルイノウ」
と照れ隠しのようにふざけ出した。それにつられて茂も修も手を叩いて、丸く輪になって喜んだ。
「アツカルイノウ」
「アツカルイノウ」
その輪に辰郎も、続いて信男も一緒に混じった。
「アツカルイノウ」
子ども達は興奮したように、騒いで踊った。大人たちもガス燈の灯りに時代の変化を感じながら、喜ぶ子どもたちを見つめていた。

この小説は、明治・大正・昭和と激動の時代を乗り切った実在の人物をモデルとした小説です。先行き不透明な現代を生きるヒントが得られるような気がします。ぜひこれからも楽しんでご一読ください。

絵：落葉画廊

編集後記

少し暖かくなってきたと思ってコートを着て出かけると「今日は着てこなくてもよかったかな」と感じる日があり、反対に油断して薄着で出ると寒さが身にしみる日もあります。

こりす西陣にきている子どもたちからは「卒業遠足」「卒業式練習」などの言葉が聞かれ、お出かけ先では「卒園遠足」と思われる子どもたちの団体に出会うこともありました。春が近づいているのだと感じる一方で、私自身も新しいことを始める今、春から先どうなるのだらうという不安もあります。それでも、そんな気持ちごと抱えながら、少しずつ春を迎えていけたらと思っています。

(恩庄か)

おしらせ

★ゆりいか研究会のウェブサイトを新しくしました。ゆりいか通信のページからコメント等が送れるようになりました。ぜひ感想や励ましのメッセージをお寄せください。

★令和8年2月号までのゆりいか通信をウェブサイトに掲載しました。関心おありの方にご紹介ください。